

肉親賦

丹羽文雄

講談社

© Fumio Niwa 1969

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は

お取り替えます



肉親賦

昭和四十四年十月二十八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

振替 東京三九三〇

電話 東京(九四二)一一二一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定価 五百五十円

(分) 0-0-93 (製) 123295 (出) 2253 (0)

目次

肉親賦	五
追憶	九
寢椅子の上で	七
妻の氣持	九
無慚	二九
蛙	一七
私の告白	一六
にわか雨	一八
恩愛	二五

装
幀
香
月
泰
男

丹羽文雄作品集

肉

親

賦

汽車のつく時間がせまっていた。私は家に残っていて、三十九年ぶりにアメリカから来る姉を迎えるつもりであった。駅には孫と運転手が迎えにいく手筈になっていた。かんじんの私が出迎えないというのも、すでに妻と娘が羽田空港で姉を迎えていたからである。しかし、それはすぼらの言訳にすぎなかった。孫が車にのりこみ、運転手もつづいて車にはいると、

「私も駅までいくよ」

それなら前から駅まで出迎えることをきめておけばよかったのである。私は急に心が軽くなるのを感じた。何故家にいて三十九年ぶりの姉を迎えようとしたのか。それは単にすぼらのせいばかりではなかったようである。その問題の究明はあとまわしにすることにした。軽井沢駅の下りの歩廊に立った。三十九年ぶりに姉を迎えるという特別の感情はなかった。

「私の姉弟は、すこし度がすぎるくらいに仲がよすぎるけど、あなたはお姉さんに対して冷

淡ね。不思議に思います」

と、妻はよく私にいった。

「自分らの姉弟を例にしてはいけないよ。私はこれでも姉に冷淡であるとはすこしも思っていない。私には、私流がある」

「そういえば、亡くなったおばさんも、あなたには偏愛だったけど、お姉さんのことには冷淡でした」

「とおくにはなれていて、母としては何十年も会っていないから、情が移らないのだから」

しかし、わが家の特徴として、父は子に対して冷淡、子は父に対して冷淡、母も姉に対して冷淡であった。しかし、愛情が欠如しているというのではなかった。冷淡というの也是比较の話で、そういうやり方というほかはない。愛情表現の問題であった。すくなくとも私はそう思っている。もの心がついてから、私は父から記憶にのこるような干渉をうけたことがなかった。その原因をたどると、ひとつには寺院という生活環境のせいではなかったかと思う。だだっぴろい庫裡に起居していた。親子が顔を合わせるの、食事どきに限られていた。そうした生活環境が愛情表現に何かと影響をあたえないわけはないであろう。三間か四間ぐらいの家の中で、しょっ中家族が顔を合わせている環境とはちがっている。私はいつも、母のそばにいた。だから母は私を偏愛したのだろうか。

列車がついた。降りるひとはすくなかった。娘と妻にはさまれるようにして姉が下りて来た。

「やあ、いらっしやい」

と、私はいった。姉は地味な夏服をきていた。白髪の多い、ゆたかな髪であった。服が身についている。いつもは和服で、たまに服をきるという感じでなく、いかにも永年服でとおしているひとの感じであった。六十八歳の小柄な姉は、しゃんとしていた。歩行もすっかり靴に慣れている。

「このたびは、いろいろとお世話になりました。ありがとうございます」

他人行儀に挨拶をされて、私は面くらった。私のぞんざいな迎え方が悪かったのではない。三十九年目ではないか。私は自分の淡々とした態度がうらめしかった。こういう場合外人ふうの習慣があれば、ふさわしい場面になれるのだと思った。姉弟は抱きあい、頬をすり合わせる。三十九年目の再会である。ことばは要らない。たがいにしっかりと抱き合うことで、三十九年をひととびに越えて、直接相手の心に達するものがあるはずだった。相手をじかに、強烈に感じることも出来るのだ。日本の習慣は窮屈なものである。流動するものをばんでしまう。小柄な姉を抱きよせて、私はその背中を軽くたたいてやりたかった。それに代わる日本語はみあたらなかった。

姉は羽田につくと、すぐその足で私のいる軽井沢に挨拶にいきたいといった。私に最初に

礼がいたいというのである。今年のはじめに姉はつれあいを亡くした。私はなぐさめの手紙や香典をおくった。そのことが姉には負担となっていたらしい。しかし、アメリカにいてもあまり旅行をしたことのない姉が、いきなり太平洋を何時間もかかってとんで来たのである。六十八歳の肉体にこたえないはずがなかった。それをおそれ羽田についた日は娘のマンションで一泊し、つぎの日に軽井沢にくるように家内と娘は手筈をきめていた。案の定、姉は疲労していて、その日の内に軽井沢に来ることが出来ず、マンションで病人の状態になった。医者を呼ぼうかということにまでなったが、持ち直した。そうしてそのつぎの日の軽井沢行となった。

「お姉さんは一日も早く四日市へいきたがっているのよ。四日市へはいつだって行けるのだから、からだがふだんの調子に戻ってからおいでになるといいというのに、いうことをおききにならないの」

と、妻はこぼした。

「どうしてそう生れ故郷へいそいでいきたがるのか、わからないな。四日市はどこへもいかないよ」

私は妻のことばに合わせたが、姉の気持がわからないではなかった。姉は手紙の上で軽井沢の別荘をみたがっていた。軽井沢をひきあげる時機も近付いていたので、一週間ぐらい山にいて、私たちが、東京にひきあげるとき、いっしょに東京にはいればよいと私は考えてい

た。

「お寺にかえって、お父さんの法事もしたいし、亡くなった主人の実家を訪ねなければなりませんし、実家の菩提寺で法事もつとめなければなりませんし、いろいろしなければならぬことがあります」

と、姉はいった。私と姉は軽井沢の応接間で二人きりとなった。姉の頭の中には、観光旅行者のようにスケジュールがぎっしりとつまっているふうであった。

「何もそういそぐことはない。来年の正月をこちらですませてもらうつもりでいるのだから、ゆっくり行動しなさい」

妻や娘は、三十九年目の姉弟の再会というので、ことさら席を外していたのだ。が、三十九年目の再会という劇的な雰囲気はすこしも生れなかった。姉のことばづかいは、よそゆきであった。何故もつと親しい口調になれないのか。しかし、どうやらそれは姉のふだんの調子のものであった。

私だけが三十九年目の再会であったが、妻や娘や娘の子供や、娘の良人の商社マンは、アメリカでいろいろと姉の世話になっていた。娘の良人が、サンフランシスコにつとめていたころは、娘とその子はしょっちゅうクロスアンセルスの姉のもとに出かけていた。

「紋多さんの孫のおしりの世話をしようとは思わなかったです」

と、姉は娘にいったそうである。

「もし日本にいったら、圭子さんとこに泊めてもらいます。紋多さんのところは、お客さんも多いらしいし、お手伝いさんもいて、お世話になるのが心苦しいから」

娘を亡くしている姉は、私の娘を自分の娘のように感じていたらしい。娘は姉のもとにいるあいだ、いい話相手になっていたようである。娘は姉の昔話をいろいろと聞いた。それまでたれにも心を許して話の出来なかったことも、私の娘というので安心して物語っていたのだ。

「せっかくおばさんとお父さんをふたりきりにして上げたのに、三十九年ぶりの感激の舞台にはならなかったのね」

と、娘はあてが外れたといった。妻もつけ加えた。

「わざわざ遠慮してたのに、あなたの姉弟は、淡々としてるんですね」

姉がつれあいと帰国を思い立ったのは、去年の末であった。荷物を先に船で送り出した。自分らは飛行機で来ることになっていた。今年のはじめ、つれあいが脳溢血で死んだ。姉の帰国は中止された。私たちはがっかりした。すると、半年後に姉が日本にくるといつて来た。日本人の習慣では、つれあいに亡くなられると、一年間ぐらひは公の席にも顔を出さず、旅行もしないことになっている。喪に服するという意味である。そのことを知っているはずの姉の突然の帰国の知らせであった。

「お姉さんも年齢が年齢だから、いったん帰国という気持ちになったのだから、いまの内にか

えっておこうという気になったのですね」

と、妻は臆測した。私もそうだろうと思った。姉の帰国のふかい意味に私はうかつであった。きちょうめんな姉の性格は、寺に生れただけに、故人に対して時代おくれのような考えをもっていた。法要をいとなむことを重大に考えていた。今日の仏教は葬式仏教に墮落しているなどと私も野暮なことはいいたくないが、十八歳のとき生れた寺を出て、五十年が経過している姉の人生は、そのあいだずうっと葬式仏教に対して疑いも抱かず、すなおに従って生きて来たのである。娘を病死させてから姉の宗教心はもえあがったようであるが、旧来の仏教感覚から一步も外れなかった。

姉は二タ晩軽井沢に泊り、娘が案内役になって四日市に行くことになった。名古屋駅まで四日市の弟が出迎えることになっていた。

「姉の気が知れない。郷愁はわかるが、すこし異常だ」

「お姉さんにすれば、四日市にいかなければ、日本にかえったという気になれないんですよ。東京も軽井沢も、お姉さんには関係のない土地ですからね」

「娘の家にはかりいたね、この二日間……」

敷地の中に、娘の家、息子の家が別棟になっていた。

「娘のところは万事が外国風に出来てますから、気が休まるんでしょう。それに娘とお姉さんは、たれよりもながつきあっていったんですもの。娘の家にいると、ロスの家のような気

がするんでしょね」

「四日市へいっても、昔の面影はどこにもない。姉はうろたえるだけではないか」

旧東海道に沿った家々と、港から出来ていた四日市は人口四万程度の田舎の市であった。

が、いまでは二十余万にふくれあがり、重工業都市となっている。四日市公害で有名である。私の生まれた寺院は、戦災で烏有に帰した。が、いち早く本堂を再建し、庫裡も三階建が出来た。弟は境内の一部で保育園を経営している。姉はそんな古里にかえって、途方にくれるのではあるまいか。

四日市にいる二人の弟と、東京にいるひとりの弟、宇都宮に嫁いでいる妹は、私たちと母親がいであった。四日市の弟たちと会っているかぎり、姉は、私と姉を生んだ母のことをきりはなしていることが出来るのである。そのことを私は重大に考えなかった。が、日が経つにつれて、そのことを考えないわけにいかなくなった。姉はとくにそのことを意識していないであろうが、姉の行動の裏の、意識下の問題に私はこだわるようになった。

姉は四日市の生れた寺につくと、弟たちに歓迎され、たまたま檀家に法事があり、弟はそこへ姉と娘をつれていった。そこには姉の小学校からの友達が生きていた。私の記憶にもあるひとであった。大柄で、色の白いひとであった。娘は生れてはじめて檀家詣りを見学して、面くらっていたようである。姉の友達は、娘を私の妻と思いちがいをした。そうでないとわかると、